

「谷根千おもてなし課」が 地域の課題に取り組む

多田 亮介

現在の勤務校等
東京都文京区立千駄木小学校

在外での勤務校／帰国年月
キナバル日本人学校／2014年帰国

日本に来ている外国人の目線で地域の課題を発見するとともに、その解決のために自分たちができることを考えて実践する、対話型授業とグループワークをベースにした国際理解教育のプログラム。「世界を知ろう」、「世界とつながろう」、「世界とのかけ橋になろう」の3段階から成り、地域の人々の協力を得て実施されている。



実践・活動の内容

「こちら谷根千おもてなし課」は、文京区立千駄木小学校小5の1年間を通じてのカリキュラムである。

1学期は、自分の好きな国をひとつ選んで、「ガイドブックに載っていない、とっておき情報」として発表した。調べる国は自由に選んだ。アメリカや中国などにもっと偏るかと思っていたが、海外在住や旅行経験のある児童も多く、サッカー好きな児童が南米の国をあげるなど、子どもたちにとっての外国は多彩だった。

この調べ学習と発表・対話を通じて、児童は世界と日本が違うことを実感する。導入には、私がマレーシア時代に撮影した移動遊園地の小さい観覧車の写真などを見せて、現地で見聞したことやその時に感じたことを話している。

2学期は、外国人と自分たちとの習慣や文化の違いを調べて発表した。日本に来た外国人がどんなことに困っているか、さらにその困りごとを解決するためには何をしたらよいかを考えた。たとえば宗教上の理由でブタを食べられない人に、日本語で「トンカツ」と書いてもわからない。ではporkと書いておけばよいのか？ それでは英語ができない人にはわからない？ ならばブタのイラストはどうだろう？ などと対話が進んだ。そして、実際に外国人を迎えている現場ではどのような工夫をしているのかを、子どもたちがグループを組んで、谷根千の街に出て商店や飲食店などに取材してまわり、その結果も発表した。

3学期は、取材したことをもとに、街の人が外国人とかかわる中で「困っていること」に注目した。それは同時に、文化・風習が違う外国人が認識・理解できずに当惑することでもある。そこで、この双方の困りごとに対して自分たちに何ができるかを考え、それを実際に形にしていた。過去に実現したものは、英語のメニュー、地図、トイレの場所がわかる地図、ポイ捨て禁止のポスター、寺院での参拝作法の図解・多言語ポスターなどである。それらの成果品の一部は、商店街の商店や寺院などに置いてもらった。



児童による成果品 お寺の作法

本プロジェクトは、地域の力を借りていることが大きな特徴である。地元の商店街などの人達が、子どもたちの取材や成果品の活用に協力してくれた。

なかでも中核的な存在になっているのは、谷中で澤の屋旅館を経営する澤功さんで、毎年、三学期のはじめにゲストティーチャーとして招いている。ちょうど困りごとを抽出して解決策の検討と制作を始める時期にあたる。

澤の屋旅館は家族経営の純日本式の旅館だが、海外サイトでは有名な存在である。和室に布団という外国人がイメージする「日本」をあえて残し、ロングステイ客に必要な洗濯機を置くなどの配慮をして、片言の英語とイラストなどを駆使して毎年多くの外国人を受け入れている。子どもたちは、外国人対応は「何でも英語にすればよい」という発想になりがちだが、澤さんの実体験に基づく話を聞くと、言葉ができるだけですべてがうまくいくわけではないことに気づく。また、英語ができなくてもコミュニケーションがとれることを知る。このことで、視点を転換し、視野を広げることは、その後の作品づくりの着眼点にも影響する。また、澤の屋旅館には成果品を置いてもらうので、子どもたちは、自分たちがつくったものが実際に外国人の役に立つかもしれないという期待をもつことができる。

プログラム全体は多様な視点を共有しアドバイスし合うというグループワークを基本にしており、対話なしには進んでいかないような設計になっている。

実施	主な学習活動	目標上の学習成果
第1次	1 <導入> 「今年に東京でオリンピックが行われる」これからの学習の目的や対象を知り、これからどんな準備が必要であるか話し合う。	●話し合いの場について知るこの重要性に気づくことができる。
第2次	2 <課題設定> 自分の関心している点について、知っていることを発表し合い、調べてみたい点を決める。	○グループ作りを行う。 ○自分の関心している点や地域について、理由を明確に発表し合う。(他者との対話)
第3次	3 <情報収集> ○自分や地域のグループごとに調べ学習を行う。 ○「ゲストティーチャー」の動画、インターネット、本等を使って調べ学習を行う。	●必要な情報を取り出し、収集している。 ○外国と日本の違いを知り、関心を高める。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。
15分時間	4 <発表・対話> ○自分の発表の仕方、まとめるのを考える。	●わかりやすいように発表の仕方を実践している。
15分時間	5 <まとめ・発表> ○グループごとに発表をつくり、プレゼンテーション形式で発表する。 ○他のクラスと発表の交流がある。	●わかりやすくまとめている。 ○発表の仕方の違いを知り、関心を高める。自分もかきとることができるようになる。
第4次	6 「海外の小学生の生活を調べよう」 ○自分や地域、その国の小学生の生活を調べ、ワークシートにまとめる。	○1 日本や海外の小学生の生活について調べたりも伝える。
第5次	7 <導入> ○外国の人々と仲良くするためのヒントを考える。 ○実際に調べた海外の小学生の生活を思い出して、互いに伝え合い、考えを交流する。	●多様な意見があることに気づく。 ○自分の考えや意見を伝えようとする。 ○相手の考えや意見を聞く。 ○お互いの意見から自分の考えを整理している。 ○自分の考えや意見を伝えようとする。(他者との対話)
第6次	8 <課題設定> ○外国と仲良くするためのヒントを調べる。 ○様々な海外の小学生の人々と仲良くしていくには、どのようなことが必要なのかグループで話し合う。	●実際に調べたことに基づいて、考えることができるようになる。 ●話し合いの場を通して、相手と意見を整理して理解し、課題を共有している。
第7次	9 <情報収集> ○様々な海外の小学生の人々と仲良くしていくために必要なことをグループで調べる。 ○動画や動画、生活の体験学習を行う。	●必要な情報を整理している。 ○その国の生活を体験できるようにする。

15分時間	1 <導入・対話・まとめ・発表> ○目標、授業の目的を定める。 ○グループごとに発表する。 ○全体で情報共有。 ○以上の3点を振り返り、グループの考えを深めていく。 ○グループごとの発表を発表しあう。 ○他のクラスと発表の交流がある。	○説明を忘れずに整理を言っている。 ○外国と日本の対話。 ○友達の意見をよきまかせようとしている。(他者との対話) ●話し合いの場や他者からの情報からよりよい解決方法を見つける。 ●これまで経験したことを相手に伝わりやすいように工夫して発表している。
第3次	1 <導入> ○外国と日本に、干渉や干渉や干渉を知らせる。	○外国人の生活に立ってみることで、理解が深まり、自分たちで考えることができるようになる。自分たちの思いや考えを伝える。
15分時間	2 <課題設定> ○オリンピックまでの6時間で、自分たちで決めることを考える。	●自分の考えを伝える。友達の気づきや意見を聞き、課題を共有している。
15分時間	3 <情報収集> ○グループになり、外国人がどのようなことをしているかについて調べ学習を行う。 ○実際に店の人や外国人観光客に話を聞く。 ○外国人相手に仕事している方から話を聞く。	●状況を考え、インプットしている。 ○外国との対話。 ○外国に立ってどのような工夫やサービスが行われているかを知っている。
15分時間	4 <発表・対話> ○グループで話し合い。 ○外国人たちが何をかきとっているかについて、自分たちで考える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。	○実際に実行できることを考えるように声をかける。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。
24時間	5 <まとめ・発表> ○最終までに考えのまとめを行う。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。	○実際に実行できることを考えるように声をかける。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。 ○自分の考えや意見を伝える。

年間のカリキュラム



評価と課題

プログラムの初年度は自主発表を行う年だったこともあり、文京区の国際交流フェスタにも出展した。子どもたちの作品を展示し、希望者が参加した。2年目以降はフェスタ出展していないが、プログラムは以来8年間続き、現在も継続中である。子どもたちが調べる「とっておき情報」や、取材で発見してくる街の課題、そして課題解決のために制作するものは毎年違う。ただしマイナーチェンジはしており、たとえば、現在は2学期のテーマを「外国の小学生の生活を学ぼう」に変えている。

毎年新しい「何か」の発見があるので、停滞は今のところ感じていない。教員にとっても楽しく、やりがいのあるプログラムである。教員の予想を超えた成果もあった。トイレを貸してくれる店などをマッピングした「トイレマップ」、観光客が行くポイントに絞りこんで、そこへの行き方にフォーカスしたマップなどである。トイレマップは、取材で外国人観光客のトイレトラブルについて聞いた子どもたちが解決策として考えたもので、地元の子どもたちならではの着想だと感じた。

2020年は、新型コロナ禍で大きな軌道修正を余儀なくされた。谷根千の街から外国人観光客の姿が消え、感染防止の観点からもプログラムの大きな山場でもある取材活動を自粛せざるを得なかった。一方でタブレットが一人一人に配布されたことで、調べ学習が効率的に進むようになっている。澤さんによるゲストティーチャーは継続しているので、街の人の取材ができない分をそこで補っており、澤さんの存在がますます重要性を増している。また、子どもたちのほうから、「タブレットを使って澤の屋さんをアピールできないだろうか」などの新しいアイデアも出てきている。

このほか、社会情勢や学校の方針に左右されることはある。子どもたちの取材先は一部学区や行政区をまたぐところにもあり、そこに、放課後子どもたちだけで取材に出かけるということが問題視されたこともあった。

現在までのところ、このプログラムを作成した私自身がほぼ毎年実践しており、学校内にも「5年生になったら、世界のことをやる」という認識ができています。また、継続していることで、以前の年度との比較もでき、改良につながっている。

しかし将来的な継続を考えた場合、プログラムのコンセプトは残しつつ縮小していく必要があるかもしれない。大きな流れはそのままに個別のプログラムを別のものに変えてもよいし、むしろそのように積極的にアップデートされていくべきだと思っている。キーパーソンの澤さんも高齢なので、いつまで協力をお願いできるかはわからない状況である。新たなゲストティーチャーも模索していく時期にきている。



実践に至った経緯と提言

子ども時代にブラジルのベロ・オリゾンテ日本人学校（休校・平成14年3月文科省指定解除・認定取消）に在籍した経験があり、教師になった時から、いつかは在外校で教えたいと考えていた。東京の公立小学校勤務を経て、2011年東日本大震災直後にマレーシアのコタキナバル日本人学校へ赴任。全校生徒は15～20名ほどで、教員も派遣・現地採用合わせて数名という小規模校だった。在任中には、小4・6、小4・5、小5・6を担当した。複式学級の指導をするのは初めての経験で、2クラス分の授業準備に追われ、

複式授業の工夫を重ねていった。

コタキナバルの治安は良かったものの日本人コミュニティは小さく、食材はじめ日本のものは手に入らなかった。生活習慣の違いに自分を順応させていくのが大変だった。学校でも日常生活でも、あらゆる意味で、日本では経験できないことばかりだった。

2014年の帰国後は、文京区立千駄木小学校で小5の担任になった。区の指定校になっており、国際理解教育のプログラムを作成することが前年度にすでに決定していた。

着任早々に内容の検討をはじめた。日本ユネスコ協会や JICA にも内容について相談し、机上だけの実践に終わるのではなく、子どもたちが実際に体を動かしてできること、成果品をつくるまでやらせたいと考えた。

当時の小5は4学級あり、教諭のひとは海外での交流活動の豊富な経験を有していた。ほかの二人の担任は若手だったので、おもに彼女と私でプロジェクトを牽引した。

その前年の2013年に、2020年の東京オリンピック開催が決定していた。担任している子どもたちが高校生になる頃には、地元開催のオリンピックに高校生ボランティアとしてかかわることができるかもしれない。あるいは、オリンピックにやってきた外国人が日本で困っていた時に、手を差し伸べることができるかもしれないと思った。

千駄木小学校があるあたりは谷根千と呼ばれ、外国人観光客にも人気の高いエリアである。ここには、オリンピック開催を待つまでもなく、すでに多くの外国人が訪問しており、商店や旅館は外国語対応などの様々な工夫を実施している。また、それゆえに外国人由来の困りごとに悩まされているという側面もある。これらのことを子どもたちが調べることができれば、国際理解教育の格好の題材になると考えた。

千駄木小は、子どもたちの学力が高く、海外生活や旅行経験のある児童も多く、実践に取り組みやすい環境だった。生活指導に時間をとられる学校では、国際理解教育にじっくりと取り組む余裕がない場合もあるだろう。しかし、多文化共生をコンセプトとするこのプログラムは、困難な学校でこそ実施する意味があると思う。

プログラム実施の負担は小さくはないので、取り組みに消極的な教員もいる。しかし、実際に授業が動きだして子どもたちの反応が見えてくると、教員の評価や姿勢が変わってくることが多い。年度初めの導入授業を自分で全クラス分引き受けて実施し、軌道に乗せてから各クラス担任に任せる方法をとったこともある。

このプログラムの開発にあたっては、マレーシアでの体験が大きく影響していると思う。言葉の通じない外国で暮らした私には、逆に日本に来ている外国人が何に困っているかを実感として理解できる。その意味では自分のなかで日本人学校勤務の経験はずっと生きているし、これからも活かしていきたいと思っている。

在外校に勤務する教員は、現地で気づいたことをできるだけたくさんメモしてきてほしい。そのメモは「とっておき情報」になる。そういう視点を持ち寄ると面白いことが見えてきて、国際理解教育の素材にもなる。すると、国際理解教育に取り組む教員自身も楽しくなってくる。

国際理解教育は、単体では取り入れにくいという問題もある。しかし、たとえば外部の人をゲストティーチャーに迎える講座を核にして、その前後の授業に調べ学習や事後学習などを組み合わせるとか、キャリア教育などと「抱き合わせ」にする方法もある。その時に生きてくるのも、海外で培った人脈である。



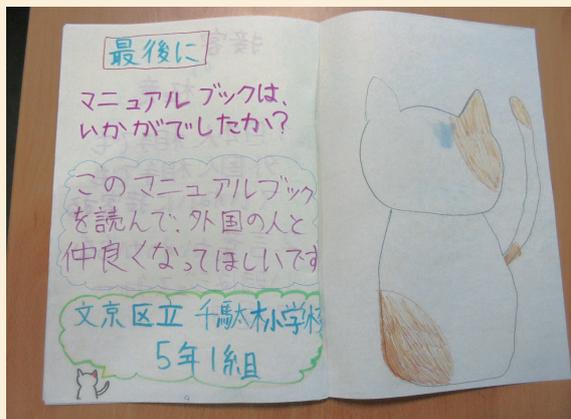
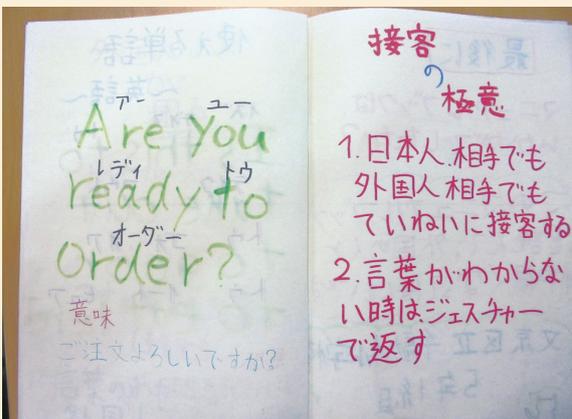
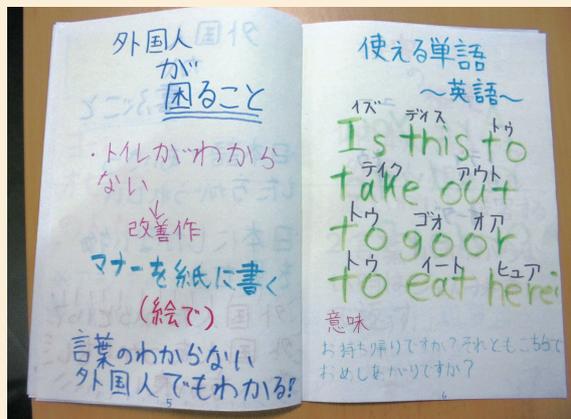
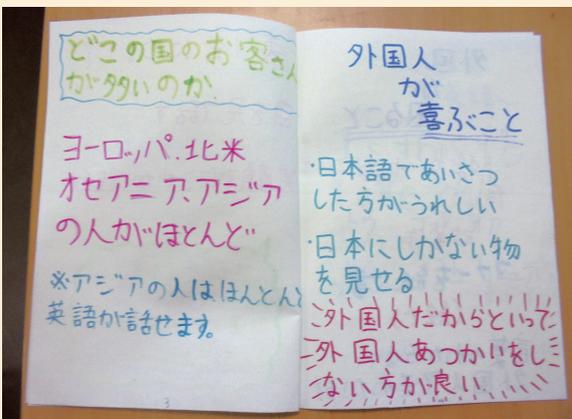
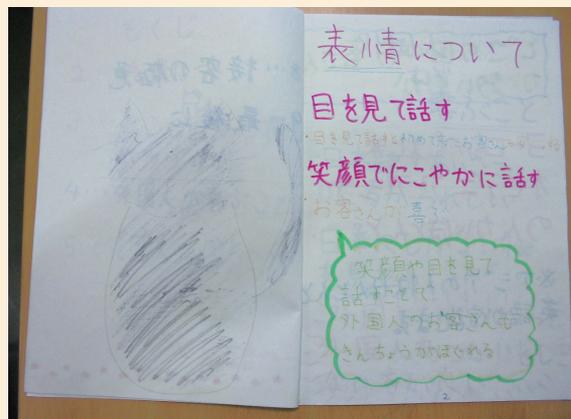
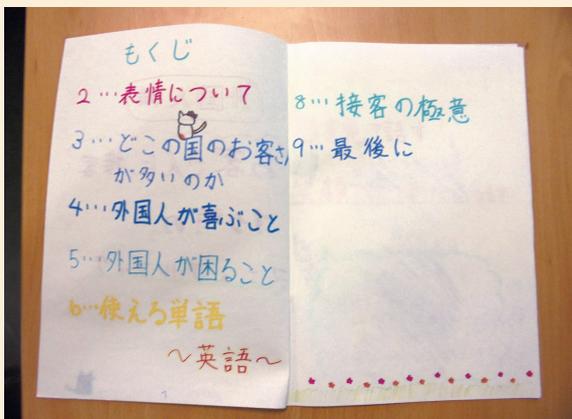
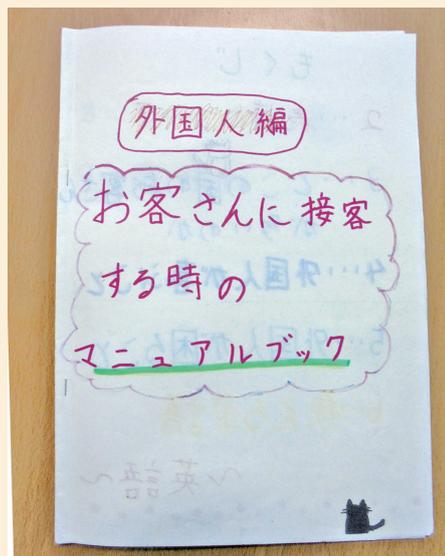
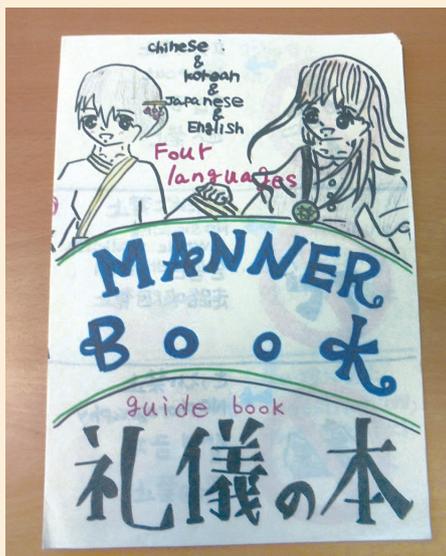
澤さん講演会



地図の作成



国際交流フェスタにて



児童による成果品 マナーブック